

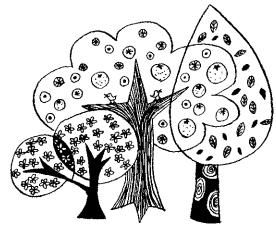
視察訪問からの学び

京都大学女性研究者支援センター

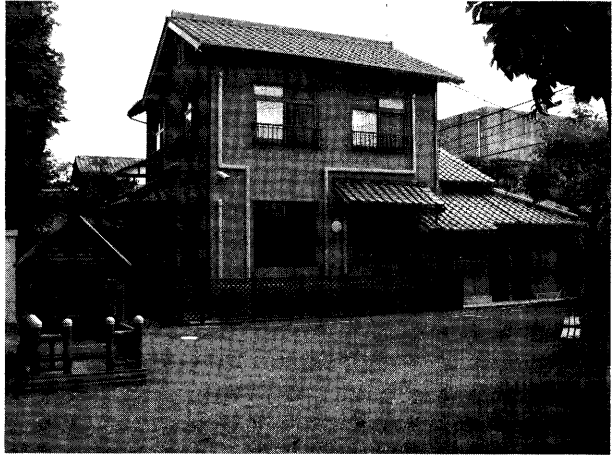
二〇〇七年秋、文部科学省科学技術振興調整費（科振費）「女性研究者支援モデル育成」事業の資金を基金として設立された、京大の女性研究者支援センターを訪問しました。二〇〇六年にセンターが設立された経緯や現在の活動、今後の展望などについて、登谷美穂子特任教授（理学博士）にお話をうかがいました。

京大の常勤の教授・准教授に占める女性研究者の割合は七%前後であり、全国の大学平均（十六%）と比べて大変低いいため、これを機会に、女性研究者

湯浅周子



ネットワークの構築を進めているとのことでした。学内に別に組織されている男女共同参画委員会ではなく、この女性研究者支援センターが中核になり、支援事業が二〇〇七年度からスタートしています。共学大学においては、男女共同参画という男性と女性が共同で仕事をしていくことや、男女の社会的な平等を呼びかける活動機関からではなく、「女性研究者」にターゲットを絞って活動するこうしたセンターが必要であることがわかりました。お茶大では、女性研究者率が役員と教授・准教授・講師ともに四十%と非常に高く、やはり共学の京大とは事情が違うのだと思います。女子大に比べると、女性研究者への



▲日本家屋の趣を残す「京都大学女性研究者支援センター」

支援はあつて当たり前のように感じていましたが、それはある意味特別な配慮なのだと気づきました。

センターは関東大震災の直後の建築で、耐震強度抜群だという、医学部敷地内の築八十年の官舎を改築した木造の建物でした。外壁は黄色に塗り替えら

れており、遠くからでもよく見えます。表庭は植栽や石がそのまま残されており、落ち着いた雰囲気でした。裏庭には芝生の広場が造られ、子どもが遊べる空間になっていました。建物内部は、木がふんだんに使われた内装を活かした改装にとどめてあつて、そのことが新築のものにはない歴史を感じさせます。一階は自主保育室、二階は事務室・会議室として利用できるようになっており、支援センターには、会計やその他の専門ごとに分かれた三名のパートタイム職員の方と、センター長の登谷特任教授が常駐していました。

○歳児保育や学童保育事業

今回、登谷先生からは、「育児・介護支援」事業について重点的にお話をうかがいました。当初、学童保育のニーズがあるのではないかという予想の元につくられたという女性支援センターは、たしかに学童保育の場としても使えるような空間でした。しか

し、実際のところ学童保育は、地域でという希望が多く、意外に需要が低いことに設立後に気づいたそうです。育児に関するアンケートを取ったところ、年度内に生まれた〇歳児の子どもを預けられる場所がなくて困っている人が多かったことから、年度の後半に復帰したい研究者への支援の必要性が明らかになり、それに応える体制をつくり始めているところでした。学内に二つの保育園があっても、途中入所は難しいということなのだと思いました。

具体的には、二〇〇七年十二月から〇歳児の子ども数名を受け入れる準備をしており、女性支援センターが、毎年十二月から翌年四月までの期間限定で一時保育の場として利用されるようになることでした。派遣保育士を雇う体制で仕組みを整え、費用面では、利用者負担分で足りない額を京大が補助する仕組みが確立しているそうです。

当初から予定されていた学童保育は、大学関係者の小学校一〜三年生の子どもを対象に、昨年夏休み

に期間限定で「夏休み！ キッズサイエンススクール」として開催されました。日替わりで大学所属の研究者が自らの研究分野について子どもたちと話し、一緒に実験してみる時間が組み込まれている活動でした。ただし、お弁当やおやつ、遊びの時間といった子どもの生活面についての配慮は、派遣の保育士に任せられていたそうです。

お話をうかがいながら、改めて「女性研究者支援」に徹した計画なのだということに強く思い至りました。そこには、教員養成を主目的とする師範学校系列の大学ではないからこそその発想の自由さがあり、理念の大枠から物事を語るができる自由さがあると思います。現実に合わせた対処の中で、よりよい方向を目指していく強力な推進力があるということに、「京大モデル」の強さを感じました。

朱い実保育園

登谷先生は、ご自身もかつて朱い実保育園に通い

ながら子育てをし、研究を続けてこられた先生です。朱い実保育園は「今もなかなか入園できない、とて入園希望者が多い保育園」だと先生はおっしゃっていました。京大内にあっても、認可保育園であるため「京大所屬者」の入園優先枠は限定的なものになるとのことでした。認可園では、大学関係者の利用したい年度途中入園や夜間保育の実施も難しいでしょう。認可保育園になることは保育園運営を安定させ、子どもにとってよりよい保育環境を保障するものの、それは大学関係者にとって利用し易い保育の場ではなくなることなかもしれません。

登谷先生のご紹介もあって、朱い実保育園を訪問する機会にも恵まれました。ここでは射場博己園長のお話をうかがい、朱い実保育園が京大の教育学や心理学研究者とも一緒に保育をつくってきたという自負を感じました。特に印象的だったのは、連絡帳ではなく、クラスの子どもの全員の様子がわかる、紙一枚の連絡用紙（個人情報保護よりも、子どもの

育ち“をみんなで考えることのできる工夫）方式を採っていたことです。送りにきた保護者が自分の子どもの欄に家での様子を書き、保育者もその日の子どもの様子をその一枚のみんなの紙に書いているのです。

時代が個人情報保護に流れる中で、「もっと大切なことがある」と言い切る射場園長の姿に、体制に流されない信念を感じました。課題のある保護者もみんなの中で育っていく、閉じた関係の中では保育はできていかないのだということを、経験的にも論理的にも語る姿に、はっとしました。

冷凍母乳を飲む赤ちゃん、授乳に来るお母さんを待つ赤ちゃんなど、〇歳のクラスでは二十人の子どもたちが生き生きと過ごしていました。私は、養護学校で非常勤講師をしています、今回このような機会を得て、ほかの保育現場での子どもたちの姿を見ることは、自らの保育観を問い直す機会となりました。

研究会への参加

京大訪問の合間に、比較教育史研究会に参加しました。保育現場関係の研究会に普段参加している私には、「十八世紀のイギリスを中心にやっています」といった参加者同士の自己紹介が新鮮で、自分が「現代の日本」という限定された区分の研究をしていることに思いました。研究会の中でも「近代研究だけでは近代（つまり自分自身）を相対化できないのではないか」という近世研究からの指摘があり、考えさせられました。現代についての研究をしている人間しか周囲にいない環境にいたので、現代について考えることと現代を対象に研究することとの関係について考える機会がこれまでなかったのです。現代という時間を、社会や時代といったより大きな流れから捉えていく視点の必要性を再認識しました。また、専門分野の異なる研究者と一対一で話した際、自分の研究について説明するということの難し

さを感じました。ちょうど修士論文で幼稚園教育実習におけるメンタリングについて取り組んでいた時期だったので、教育史研究をご専門とされる方々に新しい角度からの質問を数多くいただきましたが、どうも説得力をもって自分なりの答えを説明することができないのです。普段、研究者ではない人（現場の保育者や保護者など）に、自分の研究について話すことの難しさを感じることは多くありますが、それとはまた別な種類の難しさがあるのだと再認識しました。共通の理解や世界観などに基づいている人の中になると、説明できているような気になっても、なかなか実際にはそうはいかないことを痛感した出来事でした。

関西との言葉の違いも感じつつ、異文化・異分野の方々との交流にこれからはますます積極的にならねばと思いました。

（お茶の水女子大学 幼保プロジェクト
アカデミックアシスタント）